

席田青木遺跡5

－空港線関係埋蔵文化財発掘調査報告書2－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第777集

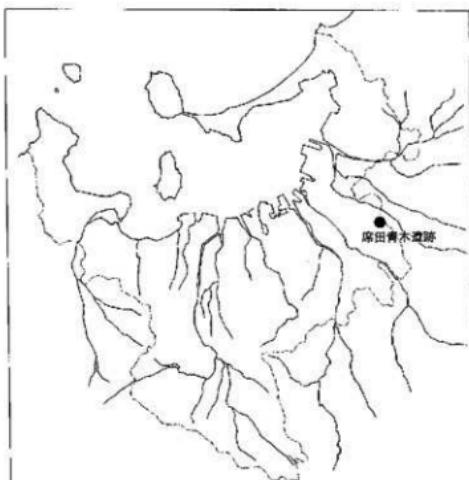
2003

福岡市教育委員会

席田青木遺跡5

－空港線関係埋蔵文化財発掘調査報告書2－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第777集



遺跡略号 MAK-5

遺跡調査番号 0107

2003

福岡市教育委員会

序

現在、福岡市はより活力のある住みやすいまちづくりの一環として、新たな交通体系の整備を進めています。本市の東を画する月隈丘陵も、福岡空港線・一般県道水城下臼井線の開通に伴う開発が行われていますが、ここは弥生時代から人々が生活し、多くの遺跡が残されているところです。

本書は、福岡空港線道路改良工事に先立って行われた席田青木遺跡第5次調査を報告するものです。調査の結果、弥生時代から中世に至る遺構、遺物が発見され、当時の生活を復元する上で多大な成果を挙げることができました。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告に至るまで、本市土木局道路建設部東部建設第2課をはじめとする関係者の方々及び地元の方々には多くなご理解とご協力をいただきました。ここに感謝の意を表すとともに、本書を文化財保護や普及、教育などに活用していただければ幸甚に存じます。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

例　　言

1. 本書は福岡市博多区青木1丁目1番地内における都市計画道路福岡空港線道路改良工事に先立ち、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成13年5月17日から8月17日にかけて発掘調査を実施した席田青木遺跡第5次調査の報告である。
2. 検出した遺構については、溝はSD、土坑はSK、ピットはSPとし、ピット以外は一括して通し番号を付した。
3. 本書に掲載した遺構の実測は担当の井上蘭子の他、谷直子、吹春憲治が、写真撮影、図は井上が行った。
4. 本書に掲載した遺物の実測は井上、谷が、図は井上が行った。
5. 本書の執筆、編集は井上が行った。
6. 本調査の出土遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので活用されたい。

遺跡調査番号	0107		遺跡略号	MAK-5
調査地地番	福岡市博多区青木1丁目1番地内			
開発面積		対象面積	1,060m ²	調査面積
調査期間	2000年5月17日～8月17日		分布地図番号	22-0080

目 次

本文目次

I. はじめに

1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査体制.....	1

II. 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の立地.....	2
2. 周辺の遺跡群.....	2
3. これまでの調査.....	5

III. 調査の記録

1. 調査の概要.....	7
2. 遺構と遺物.....	7
①甕棺遺構.....	7
②溝.....	9
③土坑.....	16
④ピット.....	18
⑤その他の出土遺物.....	18
3. 小結.....	19

挿図目次

第1図 周辺の遺跡(1/25,000).....	3
第2図 麻田青木遺跡群調査地点位置図(1/4,000).....	4
第3図 調査地点の位置(1/500).....	6
第4図 遺構平面図(1/100).....	折り込み
第5図 ST01実測図(1/50,1/4).....	8
第6図 ST02実測図(1/50,1/4).....	9
第7図 SD100実測図(1/40).....	10
第8図 SD100出土遺物実測図1(1/4).....	12
第9図 SD100出土遺物実測図2(1/4,1/3).....	13
第10図 SD99実測図(1/40)、出土遺物実測図(1/4).....	14
第11図 SD12・SD14・SD02実測図(1/50).....	15
第12図 土坑実測図(1/40)、出土遺物実測図(1/4).....	17
第13図 その他の出土遺物(1/3,1/4).....	19

表 目 次

表1 席田青木遺跡群調査一覧 5

図版目次

- | | | |
|-----|--|---|
| 図版1 | 1. 調査区南側全景(南から) | 2. 調査区北側全景(南から) |
| 図版2 | 1. S T01(南東から)
3. SD100(西から) | 2. ST02(北東から) |
| 図版3 | 1. SD100遺物出土状況(北から)
3. SD100A-A' 土層断面(北東から) | 2. SD100遺物出土状況(南西から)
4. SD100B-B' 土層断面(北東から) |
| 図版4 | 1. SD100東端落ち込み(西から)
3. SK89(北から) | 2. SD12-SD14-SD02(南から) |
| 図版5 | 1. 調査区上空より南を望む
3. 調査区上空より東を望む | 2. 調査区上空より北を望む
4. 調査区上空より西を望む(福岡空港) |
| 図版6 | 出土遺物1 | |
| 図版7 | 出土遺物2 | |
| 図版8 | 出土遺物3 | |
| 図版9 | 出土遺物4 | |

I. はじめに

1. 調査に至る経過

2000年2月8日に福岡市土木局道路建設部東部建設第2課より、都市計画道路福岡空港線道路改良工事に先立ち、福岡市博多区青木1丁目、東平尾1、2丁目地内における埋蔵文化財の有無について事前審査申請が提出された。申請地は各々席田青木遺跡群、久保園遺跡群、席田大谷遺跡群の隣接地であることから、事業計画に基づきつつ埋蔵文化財課で敷地内における試掘調査を行った。その結果、数地点で遺構が確認されたが、このうち、青木1丁目4番地内、東平尾2丁目2番地内においては2000年に各々席田青木遺跡第4次調査、久保園遺跡第2次調査として発掘調査を行い、2002年に報告書を刊行している。

さらに青木1丁目1番地内において、現地表下約1.6mで黄褐色粘質土層上面で遺構が確認された。この成果をもとに協議を行い、工事が行われる範囲内においてはやむを得ず発掘調査を行い、記録保存を図ることとした。また、土木局道路建設部道路建設第2課との間に発掘調査及び資料整理に関する受託契約を締結した。発掘調査は2001年5月17日～2001年8月17日の間に行った。

2. 調査体制

調査委託 福岡市土木局道路建設部東部建設第2課

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 生田征生

調査統括 埋蔵文化財課長 山崎純男

調査第2係長 力武卓治(前) 田中壽夫(現)

調査庶務 文化財整備課 御手洗清

事前審査 潤本正志

調査担当 試掘調査 潤本正志 大塚紀宣

発掘調査 井上蘿子

調査作業 石川洋子 泉本タミ子 伊藤美伸 乾俊夫 大賀規矩雄 桑原美津子 高着一夫

志堂寺堂 柴田博 田中トミ子 鶴山治子 濱地静子 林厚子 播磨千恵子 平井武夫

吹春憲治 福場真由美 藤原直子 北條こず江 水野由美子 森本良樹

調査・整理補助 谷貞子(九州大学大学院)

整理作業 川田京子 日下部由美子 桑野綾子 版井かおり 佐々木涼子 橋本麻里 福島由衣子

牧野ミワ 山口とし子

このほか、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について福岡市土木局道路建設部東部建設第2課の皆様には多くなご理解とご協力をいただきました。ここに深く感謝いたします。

II. 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の立地

福岡平野は、東から南にかけて背振、三郡山塊に囲まれ、北は博多湾に面し、南北に延びる丘陵と沖積平野を交互に連ねて形成される。その沖積平野を、西から室見川、樋井川、那珂川、御笠川、宇美(多々良)川が貫流し、それぞれの河川により開拓された丘陵や段丘によって画された小平野が形成される。ここでいう狭義の福岡平野とは、御笠川、那珂川流域の旧席田郡の一部、那珂郡、御笠郡に当たる部分で、この福岡平野を中心として周辺に重要な遺跡群が点在する。

席田青木遺跡群が立地する月隈丘陵は福岡平野の東を隔するように延びる。この丘陵は四王寺山から派生し、開拓を多く受けた地形を呈し、舌状丘陵や独立丘陵が多く広がっている。これらの丘陵上には弥生時代を中心とする墓地や集落、古墳群が分布する。

席田青木遺跡群は、この月隈丘陵の北端付近に位置する。西側に開けた丘陵尾根上に広がり、標高20~41mを測る。

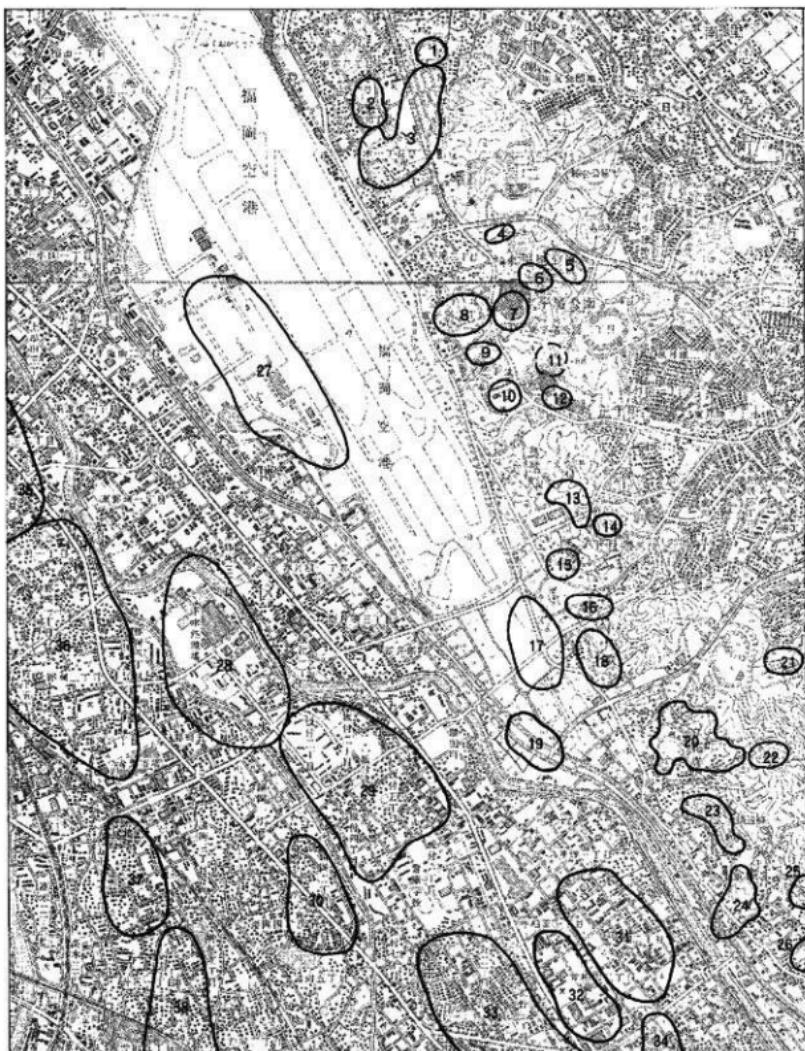
2. 周辺の遺跡群

月隈丘陵とその周辺には席田青木遺跡群の他にも主要な遺跡群が多く分布する。まず弥生時代を中心に見ると、席田遺跡群としては、久保園遺跡、中尾遺跡、席田大谷遺跡、赤穂ノ浦遺跡、宝満尾遺跡が挙げられる。久保園遺跡は、弥生時代~古墳時代までの集落が検出されているが、特に第1次調査で確認された6間×5間の大型掘立柱建物や弥生時代中期後半~後期前半にかけての焼棄された土器窓が挙げられる。中尾遺跡は、弥生時代~古墳時代の堅穴住居址、掘立柱建物、溝等が検出された集落である。未製品の輝緑凝灰岩製石包丁が出土している。席田大谷遺跡は、弥生時代の堅穴住居址や溝が検出された集落であるが、弥生時代住居址内で小型鐵斧と青銅製繩先。第2次調査では、中國舶載鏡と思われる鏡片が出土している。赤穂ノ浦遺跡は弥生時代~古墳時代の堅穴住居址、掘立柱建物、櫛などが検出され、席田大谷遺跡と同じく集落であるが、鹿の文様が施された横帯文銅鐸の鋳型が出土している。宝満尾遺跡では、甕棺墓、土壙墓が広がり、一基の上塚墓からは内光花文明光鏡が出土している。宝満尾遺跡の1km南には下月隈B遺跡、上月隈遺跡等の甕棺墓群が広がり、さらに2km南には甕棺墓、土壙墓、石棺墓が多数検出された金環遺跡が位置している。下月隈B遺跡、上月隈遺跡の近くには下月隈C遺跡が立地し、弥生時代~中世に至る水田址が検出されている。

西に目を転じると、福岡空港西側には雀居遺跡が立地する。縄文時代晩期から古墳時代に至る大規模な集落跡、弥生時代~中世の水田址等が検出され、縄文時代晩期終末期の木製農具・工具のセット、小銅鐸の鋳造に使用する中子、祭祀用の組合式案や削抜式案、短甲や漆塗木製品、馬鐸が出土している。

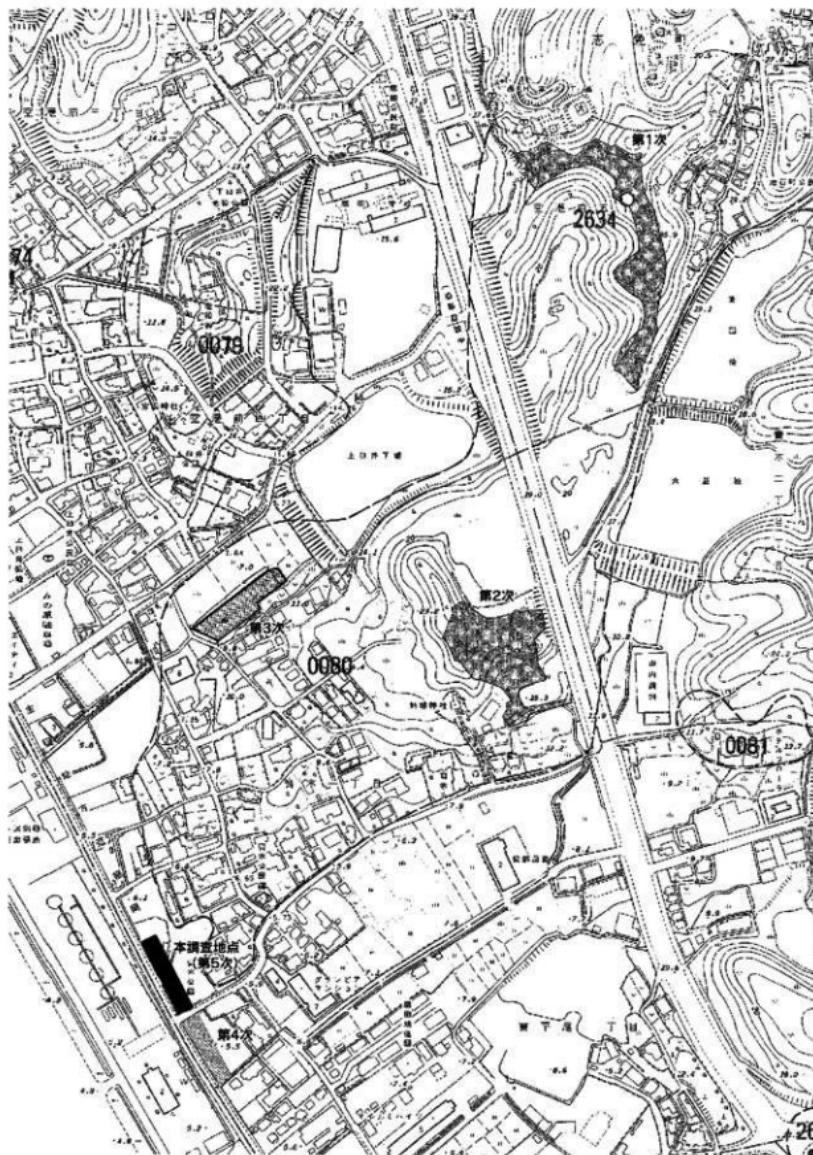
古墳では、久保園遺跡の東側丘陵上を中心に、貝花尾古墳群、新立表古墳群、丸尾古墳群が分布する。貝花尾1号墳は、小堅穴形横口式石室を主体部で持つ径12mの円墳である。2号墳は、墳丘は不明であるが、横穴式石室が主体部である。新立表1号墳は径10m以上の円墳で横穴式石室と推定される。丸尾1号墳は、墳丘は不明であるが、主体部は堅穴系横口式石室である。2号墳は、径11~12mの円墳で、横穴式石室を主体部とする。皮袋形瓶が出土している。このように近接した丘陵にいくつかの古墳が分布しているが、古墳時代の集落としては、丘陵裾部の中尾遺跡、赤穂ノ浦遺跡、久保園遺跡が挙げられ、古墳の被葬者との関連が問題となる。

このように月隈丘陵とその西側の平野部に分布する遺跡群は、それが弥生時代以降運動して展開してきたと推定され、このような歴史的展開に席田青木遺跡がどのように位置づけられるか、検討していく必要があろう。



1 中山遺跡	9 赤堀ノ浦遺跡	17 下月隈C遺跡	25 影ヶ浦古墳群	33 美野遺跡
2 上臼井遺跡	10 宝洞尾遺跡	18 上月隈B遺跡	26 持田ヶ浦古墳群E群	34 井相田A遺跡
3 麻田青木遺跡	11 丸尾古墳	19 立花寺B遺跡	27 衛居遺跡	35 比恵遺跡
4 中尾遺跡	12 宝満尾東遺跡	20 立花寺遺跡	28 那珂古休遺跡	36 那珂遺跡
5 新立古墳群	13 下月隈天神森遺跡	21 熊野古墳群	29 枝付遺跡	37 五十川高木遺跡
6 貝花尾遺跡・貝花尾古墳群	14 下月隈A遺跡	22 金剛山古墳群	30 諸岡遺跡	38 井尻遺跡
7 大谷遺跡	15 下月隈B遺跡	23 金隈遺跡	31 仲島遺跡	
8 久保園遺跡	16 上月隈遺跡	24 影ヶ浦遺跡	32 井相田C遺跡	

第1図 周辺の遺跡 (1/25,000)



第2図 席田青木遺跡群調査地点位置図 (1/4,000)

3. これまでの調査

席田青木遺跡群では今回が5回目の調査となる。

第1次調査

遺跡群の北側、丘陵の北側斜面に位置する。弥生時代中期前半から後期初頭にかけての土壙墓や甕棺墓、古墳時代終末期の横穴式石室、古墳時代の石蓋土壙墓、中世城を形成するとと思われる溝、近世墓が検出されている。特に弥生時代の土壙墓、甕棺墓は160基、近世墓は560基余り検出された。

第2次調査

第1次調査地点の200m南に位置し、丘陵から南に延びる尾根の頂部からその東斜面を経て谷部にわたる部分である。第1次調査地点で検出された甕棺墓と一連のものと推定される甕棺墓、弥生時代後期後半頃の溝や土坑、12世紀前半の井戸、12世紀半ば～13世紀後半の土壙墓が検出されている。

第3次調査

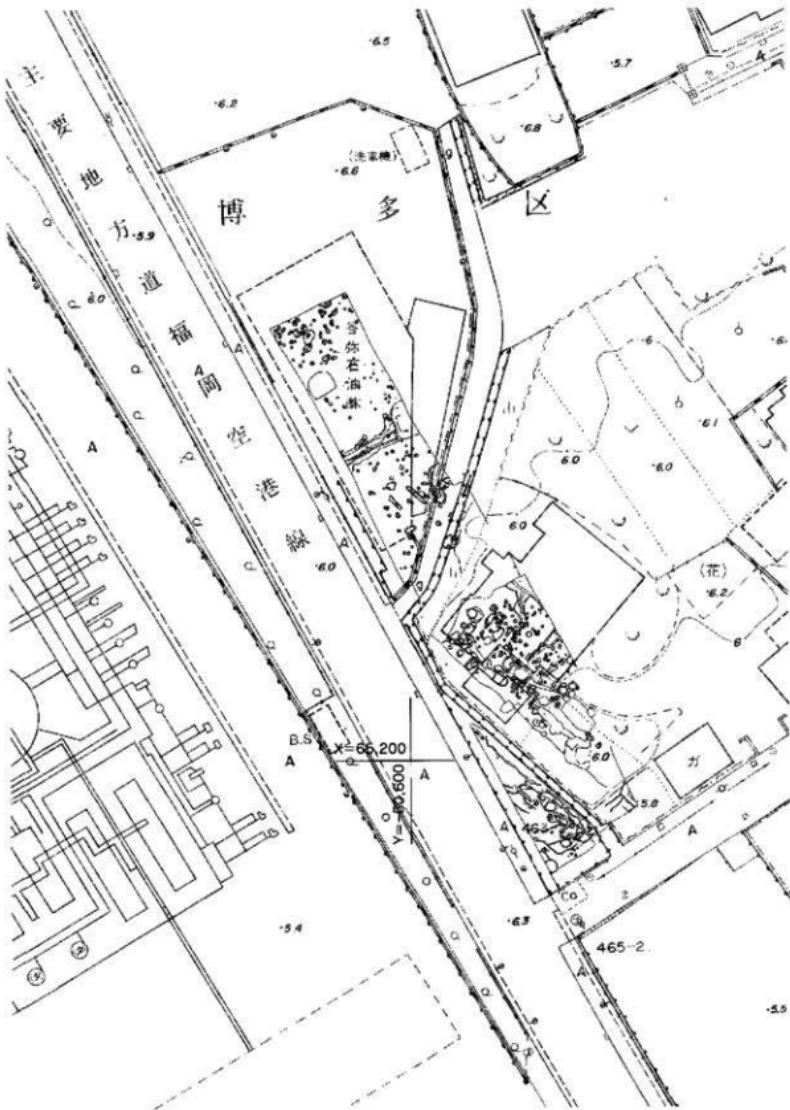
第2次調査地点から西側へ下る緩斜面上に位置する。弥生時代終末～古墳時代前期の掘立柱建物、井戸、溝、土壙、6世紀後半～7世紀初頭の掘立柱建物、環濠、古代～中世前期の掘立柱建物、土坑などが検出されている。

第4次調査

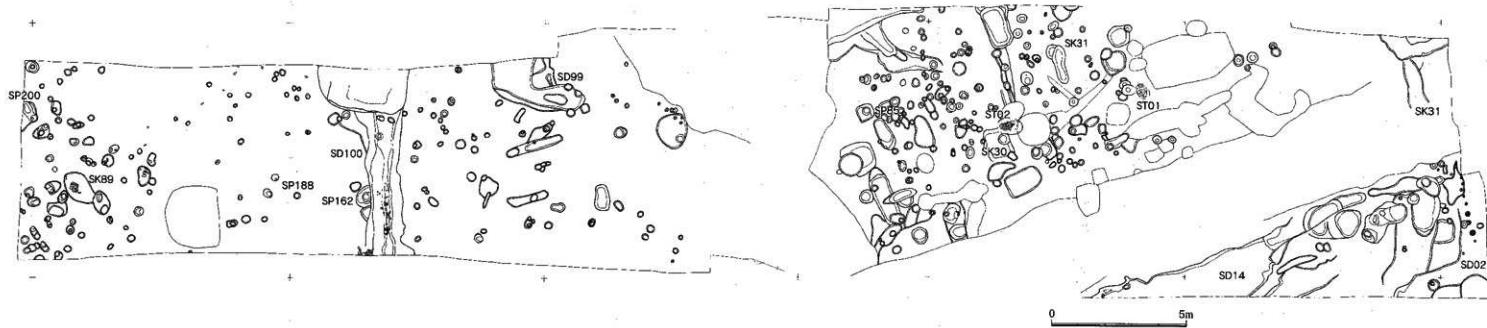
丘陵の南西麓、第3次調査地点の南に位置する。弥生時代後期後半～終末の溝、井戸、中世後半の溝、土坑、ピットが検出された。弥生時代の溝は包含層を切っているが、包含層にはおびただしい量の土礫が散布していた。

表1 席田青木遺跡群調査一覧

次 数	番 号	所 在 地	面積 (m ²)	調 査 期 間	調 査 原 因	文 献
1	9206	博多区空港前3～5丁目、青木1～2丁目	5,360	920406～921015	上地区面整理事業	市報第356集
2	9304	博多区青木1丁目314他	4,580	930510～930805	共同住宅建設・区画整理	市報第408集
3	9521	博多区青木1丁目290他	1,170	950801～950914	共同住宅建設	市報第534集
4	0026	博多区青木1丁目4番地内	548	000706～000817	道路改良工事	市報第712集
5	0107	博多区青木1丁目1番地内	706	010517～010817	道路改良工事	市報第777集



第3図 調査地点の位置 (1/500)



第4図 遺構平面図 (1/100)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

席田青木遺跡第5次調査地点は、調査対象範囲の中に、U字溝や用水路、近世以降の搅乱を含み、破壊が大きかった。しかしながら遺構面である黄褐色粘質土が表土下約20~80cmで検出され、遺構が分布していた。敷地内に残土を置く場所が確保できなかったため、調査区南東側2/3程の表土を約2.6km離れた空港線道路建設予定地内に持ち出し、かつ残った北西側1/3部分は反転しての調査となつた。調査区南東側は、最も浅いところで表土下約20cmほどで遺構面が検出された。この部分の標高は約5.6mで、第4次調査地点北側の続きと思われる中世の溝等が検出され、黄褐色粘質土のしっかりした地山が続いていた。遺構面は調査区中央から北西へ向かい急激に落ち、南東側に比べて標高が1m以上低く4m前後となる。この部分には上面に弥生時代遺物を含む包含層が堆積しており、本来の地形を残しているものと思われる。調査は、南東側、北西側とも各々遺構精査、遺構掘削に平行しながら、1/100による周辺測量、1/20、1/10による遺構平面図作成、遺構の個別実測、写真撮影等を行つた。調査期間中たびたび大雨が降り、そのため調査区は何度も冠水し、排水作業等で手間がかかったが、8月17日には、調査に関するすべての作業が終了した。

2. 遺構と遺物

①甕棺遺構

小兒甕棺が2基検出されている。以下説明を加える。

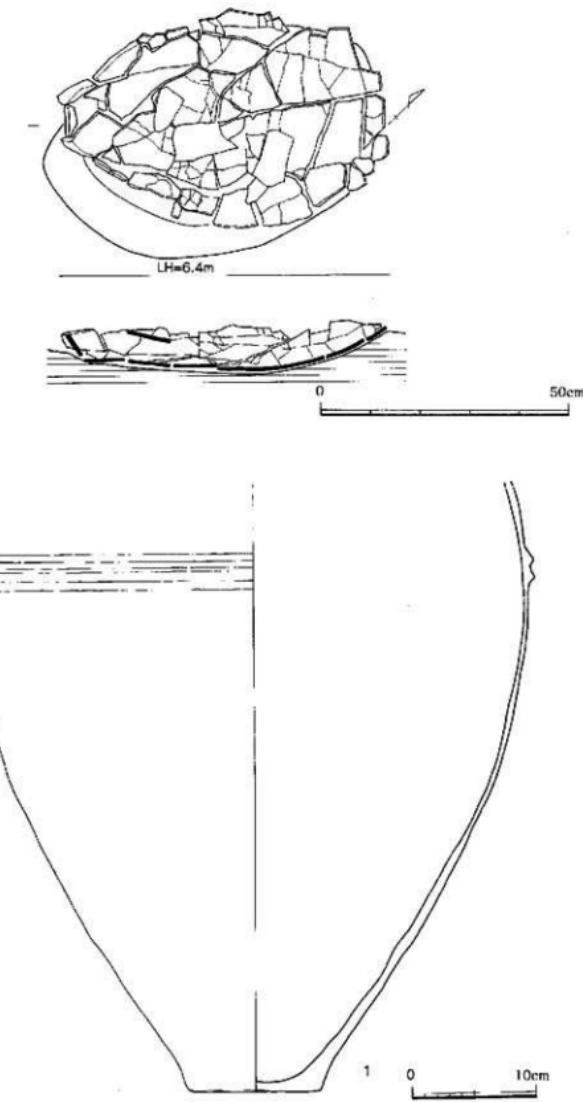
S T O 1 (第5図)

調査区南東側寄りに位置する。横位で、主軸はN-43.9°-Eにとる。上半分が削平された状態で検出された。堀方は明確でなく、甕棺内部からは何も検出されていない。甕棺は、胸部最大径が45.5cm、残高48.4cm、底部10.4cmを測る。径2.0mm以下の砂粒やや多く、金雲母、カクセン石を少量含む。淡灰褐色を呈する。ナデで調整され、胴が最もふくらんだ部分に断面三角形の突帯を二条巡らす。弥生時代中期後半頃であろう。

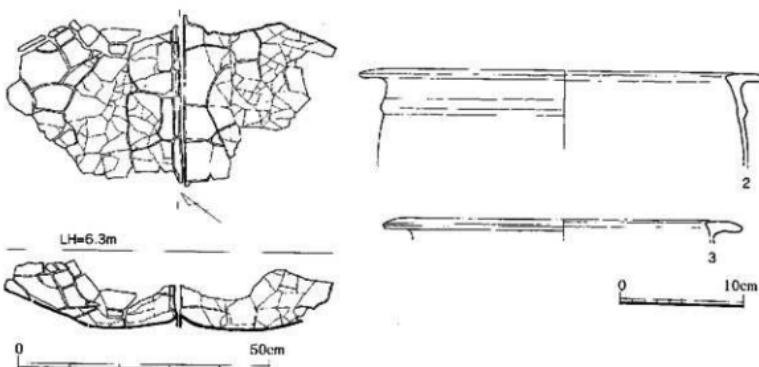
S T O 2 (第6図)

調査区南東側寄り、S T O 1の北西に位置する。合口の甕棺で、主軸はN-36.6°-Wにとる。横位で、S T O 1と同様、上半分が削平された状態で検出された。これも堀方は明確でなかった。上棺、下棺とも取り上げたものの、摩耗が激しく器壁が非常にもらかたつた。そのため復元は口縁部付近のみにとどまった。上棺(3)は、口径が28.8cmを測り、口縁部断面は鋸先状を呈する。径2.0mm以下の砂粒やや多く、金雲母を含む胎土で、明赤褐色を呈する。ナデで調整される。下棺(2)は口径32.8cmを測り、口縁部断面は鋸先状を呈する。口縁部下に断面三角形の突帯を一条巡らす。径2.0mm以下の砂粒、金雲母を多量に含み、明赤褐色を呈する。ナデで調整される。いずれも弥生時代中期後半頃であろう。

本調査区では他にも甕棺と思われる遺構を検出したが、摩耗と削平が激しく今回は図示していない。いずれも上の2基に近接して検出された。中世や近世以降の搅乱で削平が激しいが、本来は甕棺が分布していたと推定される。



第5図 ST01実測図 (1/50、1/4)



第6図 ST02実測図 (1/50, 1/4)

②溝

弥生時代と、中世の溝状遺構が検出されている。

SD100 (第7図)

調査区北西側寄りに位置する。西南西一東北東の方向に走る。埋土の状況から見て水が流れていたと推定されるが、溝の底面のレベルから、西南西から東北東へ流れていったと考えられる。延長7.3m、幅は1.1~2.0m、深さは30~50cmを測る。溝の断面は逆台形を呈する。また、溝の東端は、壁で切られているものの、最大径3.6m、深さ1.5mを測る土壇状の落ち込みとなる。これが溝と一連の落ち込みであるのか、あるいは別の遺構であるのか判然としないが、落ち込みの下層からは比較的古い時期の遺物が出土していること、上層の黒褐色粘質土層は溝と一連のものであることから、溝が落ち込みを切った状態を呈している。

遺物は溝の西寄りの底面上に分布していたが、埋土中からも多く出土している。以下出土遺物について説明を加える。

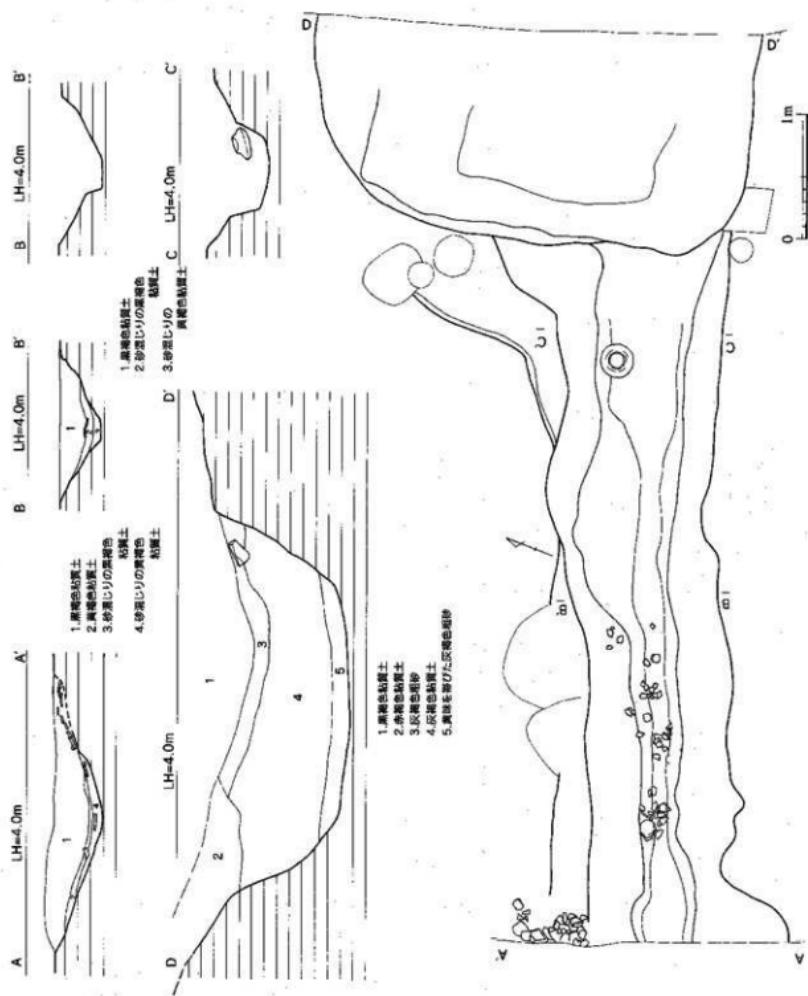
出土遺物 (第8・9図)

4~10は溝上層の黒褐色粘質土層から出土した。4は大型甕の口縁部である。甕柄の可能性が高い。口径60.2cmを測り、口縁部断面はやや内傾する鋸先状を呈する。口縁部直下に断面三角形の突帯が一条巡る。ナデで調整される。径2.0mm以下の砂粒、金雲母をやや多く含み、黄褐色を呈する。弥生時代中期後半頃であろう。

5~7は甕の底部である。5は底径7.6cmを測り、ナデで調整され、径3.0mm以下の砂粒をやや多く含む。黄褐色を呈する。6は底径7.2cmを測り、ナデで調整される。径1.0mm以下の砂粒を多量に含み、灰褐色を呈する。7は底径7.6cmを測り、ナデで調整される。

8、9は器台である。8は口縁部が大きく外反し、口唇部に刺突文が施され、上面から見ると花弁状を呈する。内面上部にはハケメが施される。口径は12.7cm、残高7.5cmを測る。径2.0mm以下の砂粒を多量に含み、黄灰褐色を呈する。9は小型の器台である。口径11.3cm、器高10.4cm、底径9.5cmを測る。口縁部は底部に比べて若干外反する。外面は縦にハケメが施された後ナデられ、内面は上面にヘラケズリが施される。径5.0mm以下の砂粒をやや含み、黄褐色を呈する。10はミニチュア土器であ

第7図 SD100実測図 (1/40)



ある。でつくねで整形され、ナデで調整される。最大径が5.5cm、残高が3.5cmを測り、ポール状を呈する。径3.0mm以下の砂粒をやや多く含み、灰褐色を呈する。

11～22はSD100の東壁際落ち込み、黒褐色粘質土層の下層である灰褐色粘質土層中から出土したものである。11～13は甕である。口縁部はやや厚めに仕上げられ、く字状に外反して開く。外面は縱方向にハケメが施され、内面はナデで調整される。口径27.4cm、残高13.6cmを測る。径3.0mm以下の砂粒、金雲母を多量に含む。灰黄褐色を呈し、外面にはすが付着する。12は口径が29.8cmを測り、口縁部がく字状に緩く外反する。外面は縱方向にハケメ、内面はナデで調整される。径2.0mm以下の砂粒を多量に含む。淡赤褐色を呈する。13は口径29.0cmを測る。口縁部はく字状に開く器形である。径2.0mm以下の砂粒を多量に、金雲母を少量含み、明赤褐色を呈する。11～13は弥生時代後期半ば頃であろう。

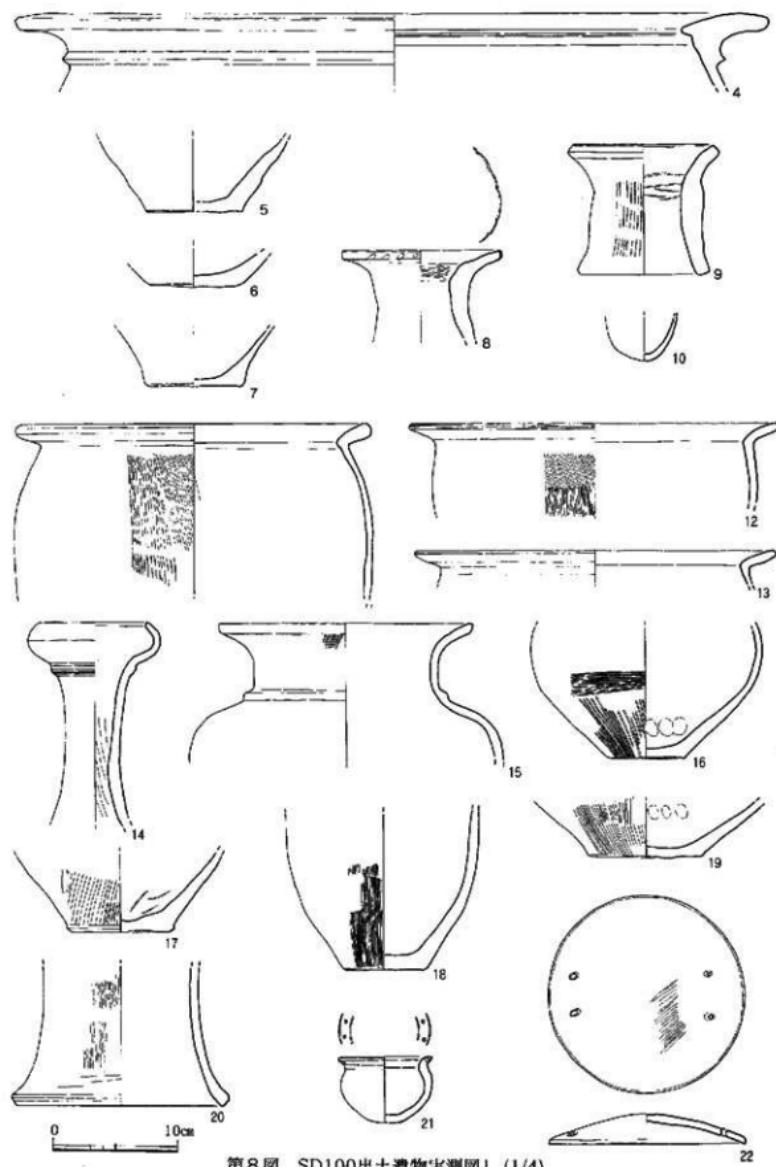
14は袋状口縁甕の頭部である。口縁部は丸く内湾し、その直下には断面三角形の尖帯が二条巡る。頸部は細く縮まり胴部へとつながる。内面上部から外面にかけてナデで調整されるが、内面下部は、粘土紐の接合痕が斜めに残っている。外面には一部丹塗りが残る。口径は8.5cm、残高は15.7cmを測り、胎土には径1.0mm以下の砂粒、金雲母をやや多く含む。淡赤褐色を呈する。15は広口壺である。口縁部は大きく外反して開く。頸部との境目には断面三角形の尖帯が一条巡る。口縁部下に一部ハケメが残るが、あとはナデで調整されている。外面には一部丹塗りが残る。11径は20.1cm、残高は11.0cmを測る。径2.0mm以下の砂粒を多量に含み、淡赤褐色を呈する。14は弥生時代中期末、15は弥生時代後期初頭頃であろう。

16、19は甕の底部である。16は底径6.2cm、残高10.5cmを測り、胴部中央で大きく張る襟形をとる。胴部外面には、中央付近には横方向のミガキが、下部には縱方向のミガキが施される。底部内面には指押さえのあとが残る。径1.0mm以下の砂粒、金雲母をやや多く含み、外面は赤褐色、内面は灰褐色を呈する。外面には丹塗りのあとが残る。

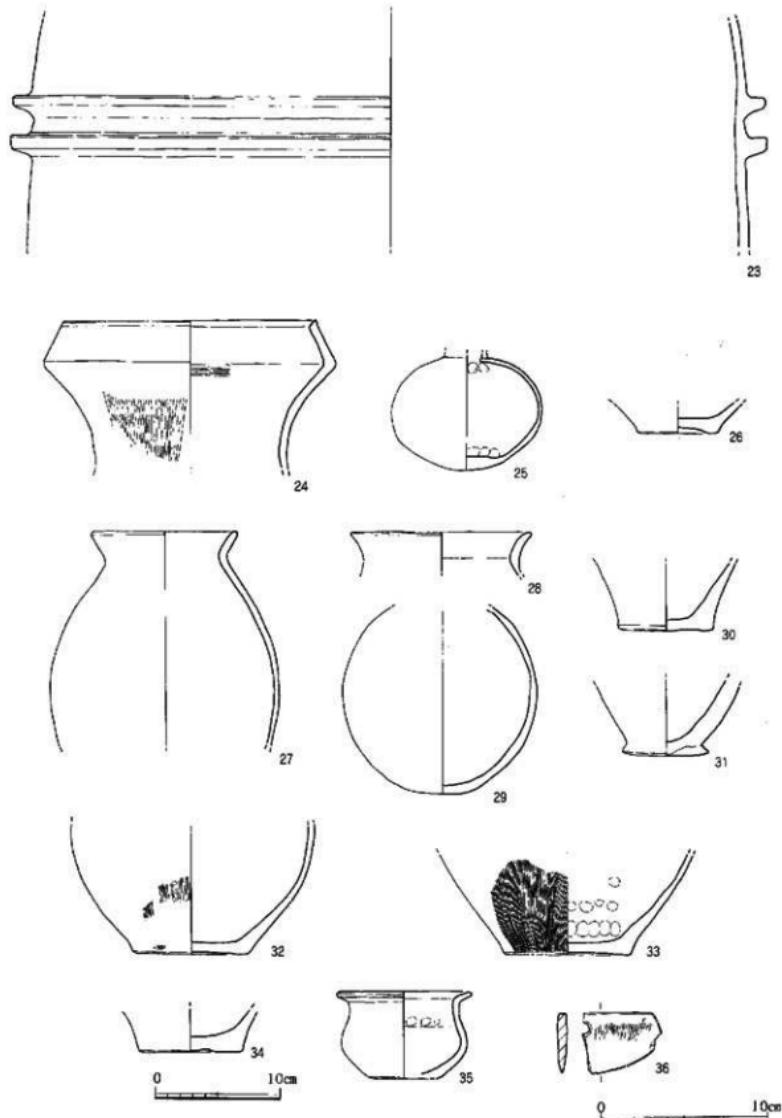
17、18は甕の底部である。17は底径5.6cmを測り、外面には縱方向にハケメが、内面にはヘラ状工具で整形されたあとが残る。径3.0mm以下の砂粒、金雲母を多量に含み、淡赤褐色を呈する。18は底径6.6cm、残高12.5cmを測り、やや小型の甕と思われる。外面には縱方向にハケメ、内面はナデで調整される。径5.0mm以下の砂粒多量に、金雲母を少量含む。にぶい赤褐色を呈するが、外面には黒斑が残る。20は器台である。底径は16.3cmを測り、底部はやや外反して開く。外面には縱方向にハケメが、内面はナデが施される。径2.0mm以下の砂粒を多量に、金雲母を少量含む。灰赤褐色を呈する。21はミニチュア土器の広口壺である。口縁部はく字状に外反して開き、胴部から底部に向けて丸く内湾する。口縁部には近接して二孔、反対側にも一対穿たれる。蓋を閉じるための孔であろうか。

口径7.5cm、器高5.4cm、底径2.5cmを測る。径2.0mm以下の砂粒をやや多く、金雲母を少量含む。灰黄褐色を呈するが、外面には丹塗りが施され、黒斑が残る。22は蓋である。平面形はほぼ正円で、笠形を呈する。直径は15.7cm、高さは2.4cmを測る。端部には、21と同様、二孔二組が穿たれている。一組は3.0cm間隔、もう一組は3.5cm間隔である。径2.0mm以下の砂粒、金雲母を多量に含むが、非常に丁寧に仕上げられており、外面は淡赤褐色を呈し、内面は灰黄褐色を呈する。外面には丹塗りのあとが残る。本来ミガキが施されていたのであろうが、摩耗が激しく痕跡は残らない。この形状と孔から推定して、21の様な形状の甕と対になる蓋ではないかと推定される。この際、孔同士を合わせて縦で縫じたのであろう。丹塗りが施されていることから、日常的に用いられた土器ではなく、祭器であったと考えられる。21、22ともに弥生時代中期後半頃であろう。

23は落ち込み部分の下層、灰褐色粗砂層から出土した。大型甕、もしくは甕棺の胴部である。断面台形の尖帯が二条巡る。最大径は60.4cmを測る。径1.0mm以下の砂粒少量、金雲母をやや多く含み、



第8図 SD100出土遺物尖端図1 (1/4)

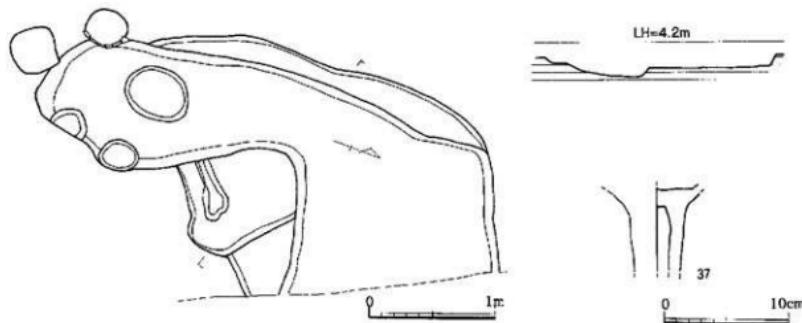


第9図 SD100出土遺物実測図2 (1/4、1/3)

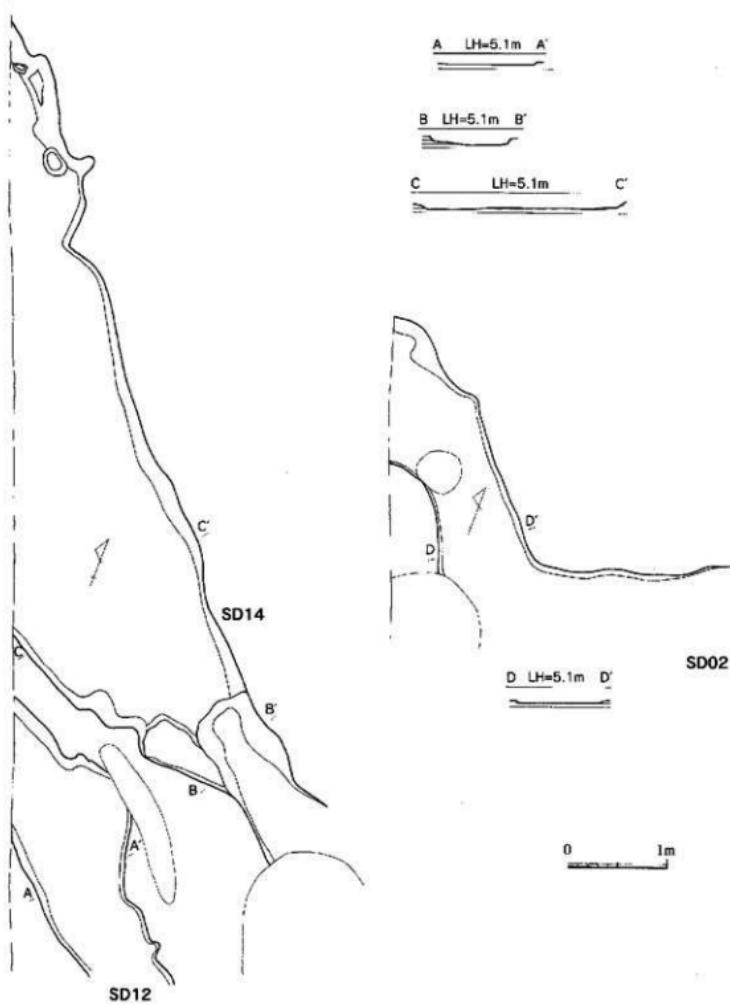
灰褐色を呈する。弥生時代中期後半頃であろう。

24、25は溝の底面で出土した。24は複合口縁壺である。口縁部は逆く字状に屈曲し、口径20.1cm、残高12.0cmを測る。外面には縱方向にハケメ、内面上部には横方向にハケメが一部残る。径2.0mm以下の砂粒を多量に、金雲母、カクセン石少量含む。弥生時代後期後半頃であろう。25は古式土師器の小型壺である。残高9.5cm、胴部最大径12.0cmを測る。胴部は横長に丸く張り、器壁は薄い。摩耗が激しいが、内面上部と底部付近に指押さえのあとが残る。径3.0mm以下の砂粒多量に、金雲母、カクセン石少量含む。明淡赤褐色を呈する。古墳時代初頭であろう。26は灰褐色粗砂層で出土した。壺の底部で若干上げ底を呈する。底径6.6cmを測り、細砂粒と金雲母を若干含み、淡赤褐色を呈する。27～35は溝の東端付近で出土した。27は壺である。口径11.3cm、残高17.2cmを測る。口縁部はく字状に緩く外反し、胴部に続く。径3.0mm以下の砂粒多量に、金雲母少量含み、明赤褐色を呈する。弥生時代後期。28は壺の口縁部である。口径14.4cmを測る。口縁部は緩く外反して開く。細砂粒少量、金雲母多く含み、赤褐色を呈する。29は丸く張った胴部を呈する、壺と思われる。残高14.9cm、胴部最大径15.5cmを測る。細砂粒少量、金雲母を多く含み、赤褐色を呈する。摩耗が激しく調整は定かではない。28、29ともに器形と胎土の状況から古式土師器と思われる。30～34は壺の底部である。30は底径7.6cmを測り、径2.0mm以下の砂粒を多く、金雲母を含む。31は底部が台状の形態を呈する。底径6.9cmを測り、径2.0mm以下の砂粒を多量に、カクセン石を少量含む。外面は灰褐色、内面は黄褐色を呈する。弥生時代終末か。32は胴部が丸く張る器形である。底部は平底を呈する。外面には縱方向のハケメが一部残る。底径は9.2cmを測り、径1.0mm以下の砂粒を多量に、金雲母を含む。明淡黄褐色を呈する。33は底径10.0cmを測り、外面には縦方向にハケメが、内面には指押さえのあとが残る。径2.0mm以下の砂粒、金雲母をやや多く含み、外面は白赤色、内面は灰褐色を呈する。34は底径8.3cmを測り、径3.0mm以下の砂粒多量に、金雲母少量含む。外面は明淡赤褐色、内面は灰黃褐色を呈する。

35は小型の広口壺である。口縁部はく字状に外反して開く。口径10.8cm、器高7.0cm、底径5.0cmを測る。内面には指押さえのあとが残り、ナデで調整される。径1.0mm以下の砂粒を多量に、金雲母を含み、明赤褐色を呈する。36は下層の粗砂より出土した。石包丁である。残長4.6cm、幅3.7cm、最大厚さ0.5cmを測る。



第10図 SD99実測図(1/40)、出土遺物実測図(1/4)



第11図 SD12・SD14・SD02実測図 (1/50)

S D 9 9 (第10図)

調査区北西側寄り、S D 100の南に位置する溝状遺構である。延長3.9m、深さ10~18cm、最大幅1.8mを測る。北から北東へ向きを変えた流れとなる。出土遺物は少ない。

出土遺物 (第10図)

37は高杯の脚部である。残高6.6cmである。細砂粒少量含み、黄褐色を呈する。

S D 0 2 (第11図)

調査区南端に位置する。北西~南東の方向で走る。延長3.2m、幅80cm、深さ5cmを測る。出土遺物はない。

S D 1 2 (第11図)

調査区南端、S D 0 2 の北側に位置する。北西~南東の方向に走る。延長2.8m、幅80~120cm、深さ5cmを測る。出土遺物はない。

S D 1 4 (第11図)

調査区南端、S D 1 2 の北側に位置する。S D 1 2 とはほぼ並行し、北西~南東の方向に走る。延長8.7m、幅0.6~2.1m、深さ6~8cmを測る。出土遺物はない。

③土坑

S K 1 7 (第12図)

調査区南端に位置する。長軸97cm、短軸30cm、深さ6cmを測る。

出土遺物 (第12図)

45は砂岩製の砥石である。残長14.5cm、幅6.8cm、厚さ3.5cmを測る。4面が砥面として使用されている。

S K 3 0 (第12図)

調査区中央やや南寄りに位置する。平面形は卵丸長方形を呈し、長軸68cm、短軸51cm、深さ20cmを測る。

出土遺物 (第12図)

38は甕の底部分である。平底で、底径8.8cmを測る。径4.0mm以下の砂粒をやや多く含み、暗黄褐色を呈する。ナデが施される。

S K 3 1 (第12図)

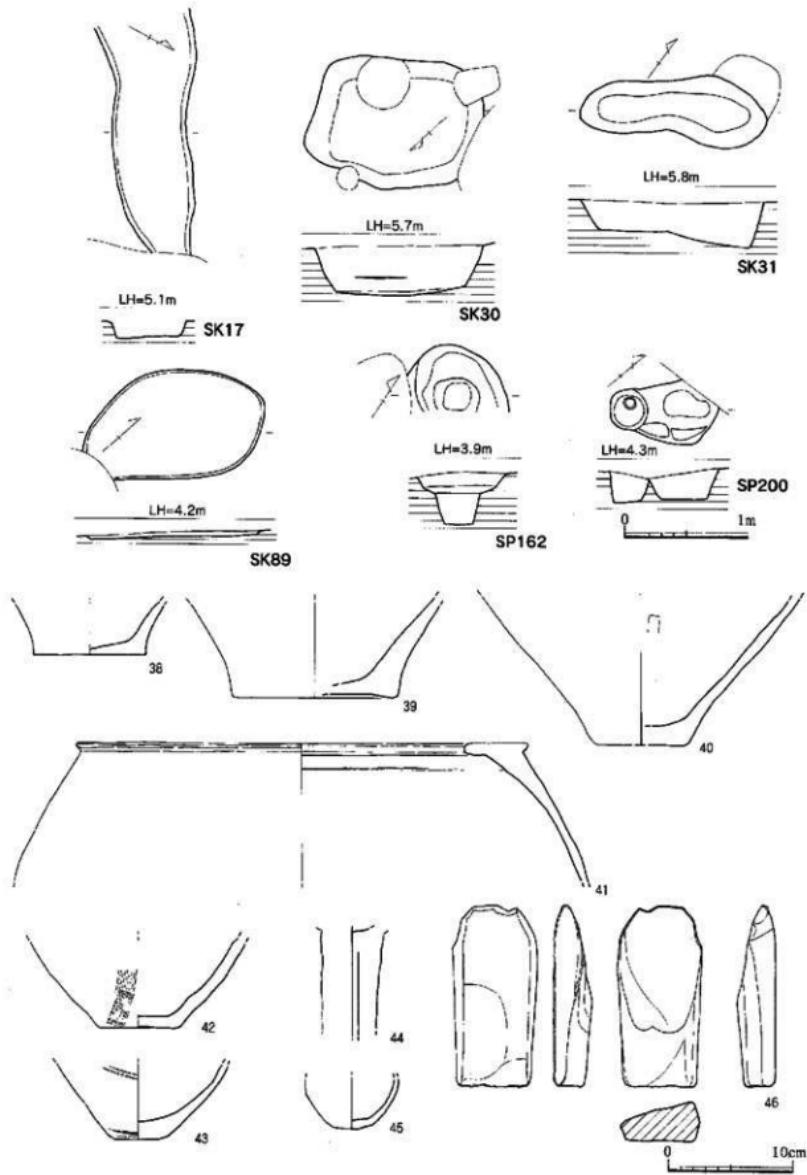
調査区中央やや南寄り、S K 3 0 の東に位置する。平面形は梢円形を呈し、長軸75cm、短軸20~29cm、深さ11~18cmを測る。

出土遺物 (第12図)

39は甕の底部である。ほぼ平底で、底径9.8cmを測る。ナデが施される。径3.0mm以下の砂粒、金雲母を多量に含み、対面は黄みがかった赤褐色、内面は赤褐色を呈する。

S K 8 9 (第12図)

調査区北端に位置する。平面形は梢円形を呈し、長軸75cm、短軸44cm、深さ2cmを測る。



第12図 土坑実測図(1/40)、出土遺物実測図(1/4)

出土遺物（第12図）

40は甕の底部である。平底で、底径7.4cmを測る。細砂粒少量含み、茶褐色を呈する。ハケメのチナデが施される。41は甕棺の口縁部である。口径36.0cmを測る。口縁部から頸部にかけて内湾し、口縁部上面は平坦に仕上げる。口縁部付近は強いナデが施される。径2.0mm以下の砂粒をやや多く含み、灰褐色を呈する。弥生時代中期中葉頃か。

①ピット

S P 162（第12図）

柱痕が残る柱穴である。SD100に切られている。長軸40cm、短軸25cm以上、深さ21cmを測る。
出土遺物（第12図）

44は高杯脚部である。残高8.5cmを測り、径2.0mm以下の砂粒多量に、金雲母、カクセン石少量含む。暗赤褐色を呈する。ナデが施される。

S P 200（第12図）

調査区北端に位置する。平面形は変形の橢円形を呈し、長軸90cm、短軸50cm、深さ25cmを測る。

出土遺物（第12図）

42は甕の底部である。底径6.8cmを測り、径3.0mm以下の砂粒を多量に含む。灰褐色を呈する。ナデ調整が施される。

S P 85

調査区中央のやや南寄りに位置する。

出土遺物（第12図）

43は鉢、または甕の底部である。底径4.2cmを測り、径3.0mm以下の砂粒、金雲母を多量に含む。ナデで調整される。

S P 188

調査区北寄り、SD100の北側に位置する。

出土遺物（第12図）

45はミニチュア土器の鉢もしくは甕である。残高4.0cm、最大径7.5cmを測る。径3.0mm以下の砂粒多量に、金雲母を含む。外面は暗灰褐色、内面は灰褐色を呈し、ナデで調整される。

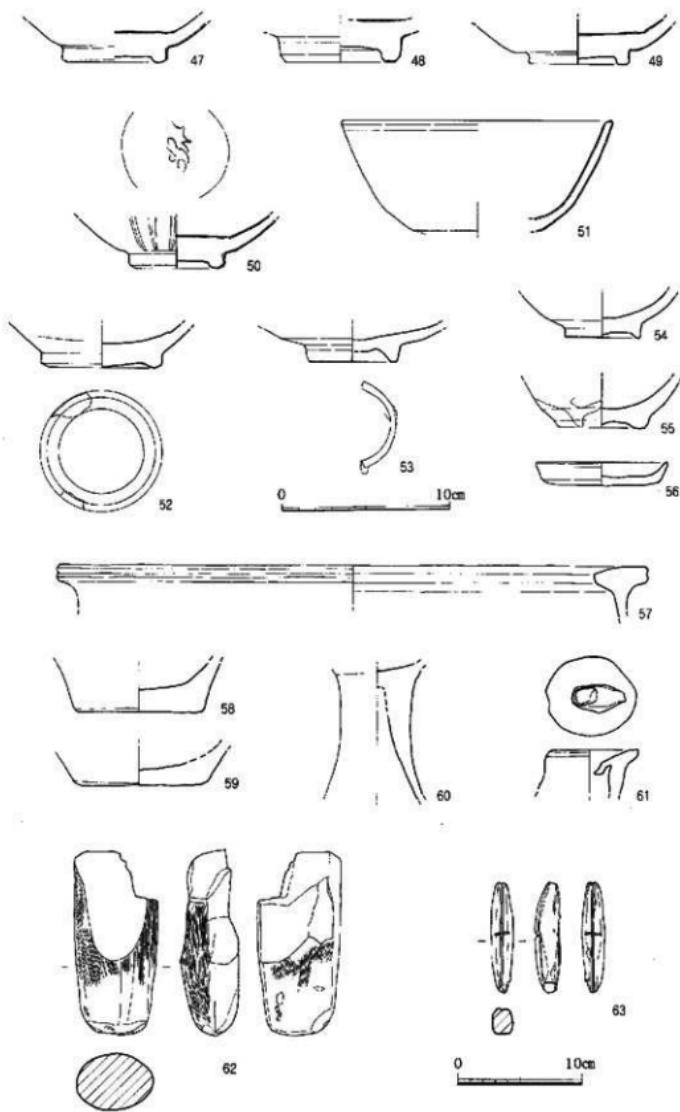
⑤その他の出土遺物（第13図）

その他、包含層や搅乱から出土した遺物を説明する。

47～49、52、54、56、57、61～63は調査区南側用水路掘方巾より出土している。現在はコンクリートのU字溝が入っているが、以前より側溝として使用されていた形跡がある。

47～49は青磁碗の底部である。47は高台の径は6.1cmを測り、灰褐色の精緻な胎土に淡いオリーブ色の釉がかけられるが、高台内部はかき取られて露胎となる。48は高台径は6.4cmを測り、灰褐色の精緻な胎土に淡いオリーブ色の釉がかけられるが、高台内部はかき取られて露胎となる。49は高台径6.0cmを測り、灰白色の精緻な胎土に淡いオリーブ色の釉がかけられ、高台内部はかき取られて露胎となり、見込みは輪状にかき取られる。

52は白磁碗の底部である。高台径は7.2cmを測り、高台内部はふくらむ。精緻な白灰色胎土に透明



第13図 その他の出土遺物 (1/3, 1/4)

輪がかけられるが、胸部下半と高台内部は露胎となる。骨付には2カ所目跡が残る。54は陶器の碗である。高台径は4.6cmを測り、金雲母を含む赤褐色の胎土に灰褐色の釉がかけられるが、胸部下半と高台内部は露胎となる。56は土師器の小皿である。口径7.9cm、高さ1.5cm、底径6.9cmを測る。底部の調整は摩耗のため明確ではないが、おそらく糸切り離しと思われる。径2.0mm以下の砂粒、金雲母やや多く含み、明淡赤褐色を呈する。

57は甕もしくは甕棺の口縁部である。やや内傾した断面鋸先状の口縁部を呈し、口径は47.4cmを測る。径3.0mm以下の砂粒多量に、金雲母を含む。淡褐色を呈する。弥生時代中期中葉～後葉であろう。61は支脚である。口径は7.2cmを測り、径1.0mm以下の砂粒を多量に、金雲母を少量含み、淡赤褐色を呈する。

62は石斧である。残長14.9cm、幅6.7cm、最大の厚さ4.5cmを測る。摩耗が激しいが若干使用されている痕跡がある。63は滑石製の石錐である。長さ6.6cm、幅1.3cm、厚さ1.5cmを測る。表と裏に紐を通した溝が十字状に入る。

51は調査区中央の側溝掘方から出土した。ここも現在はコンクリート製のU字溝が入っていたが、それを除去すると、昭和初期に使用されていたと思われる溝の基礎が検出され、それは木組みで構築されていた。ここも古くから溝として使用されていたと考えられる。51は青磁碗である。口径16.2cm、残高6.7cmを測る。灰白色の精緻な胎土にオリーブ色の釉がかけられる。55は搅乱出土。陶器碗である。高台径5.3cmを測り、金雲母を少量含む赤褐色胎土に、灰褐色の釉がかけられる。胸部下半と高台内部は露胎となる。

58～60は包含層出土である。58、59は弥生時代甕の底部である。58は底径10.0cmを測り、径2.0mm以下の砂粒、金雲母を多く含む。淡赤褐色を呈する。59は底径10.3cmを測り、径3.0mm以下の砂粒多量に、金雲母を含む。淡褐色を呈する。60は高環の脚部。残高11.2cmを測り、径2.0mm以下の砂粒を多量に、金雲母を含む。淡赤褐色を呈する。

4. 小結

今回の席田遺跡第5次調査は、前回の第4次調査に続く、空港線道路改良工事に伴う調査であった。調査地点も道路を挟んで第4次調査地点のすぐ北側に位置し、立地的にも連続してみることができたが、今回は調査前が公園敷地内であったことや用水路や側溝など近世以降の搅乱が多かったことから削平が大きく、明確な情報を得るのは難しかった。

搅乱は多かったものの、地形の状況はほぼ推定できる。前回の第4次調査地点では、調査区の南東から北西へ向かい遺構面が上がり、北西端では安定した地山となる。地形の変換地点から南端では包含層や溝が広がり、沖積地となる。本調査地点では、第4次調査地点の北西端付近の地山が調査区中央付近まで延びるが、中央付近で急に傾斜して落ち、北西側半分では包含層の堆積が見られ、地山も湿り気の多い粘質土層となる。

さて、南東側の遺構の残存状況から見ると、本来の地山面がかなり削平されたと推定される。一方、調査区の中央、地形の変換地点から北西側には包含層が堆積しており、本末の地形が残されていると考えられる。第4次調査地点と合わせてみてみると、南東～北西方向わずか120mほどの間で1～2m程の高低差がある起伏の激しい地形が続いていると推定される。

検出された遺構・遺物をまとめると以下の通りである。

弥生時代中期後半の甕棺遺構、弥生時代中期後半頃から古墳時代初頭の遺物が出土した溝、弥生時代中期後半頃の土坑や柱穴、中世と推定される溝、その他、弥生時代中期後半頃の遺物、12世紀～16世紀頃にわたる陶磁器類である。このうち、弥生時代の遺構は調査区全体にわたって検出された。甕

棺遺構は南東側に集中しており、溝は北西側の標高の低い部分に位置していた。これに対して中世の遺構は標高の高い南東側を中心に検出されている。出土遺物はほとんどみられなかつたものの、位置関係から SDO2、SD12、SD14 は第4次調査地点北西側で検出された溝 SDO3・SD04 とそれほど時期は変わらないと思われる。また、中世の陶磁器類は、遺構に伴うものは少なかつたものの、南東側を走る用水路の中から検出されている。

今回は、弥生時代中期後半頃を中心とする甕棺遺構および甕棺が出土している。これまでの調査地点に目を向けてみると、第1、2次調査地点で概期の甕棺墓が検出されている。しかし、両地点の存在する小丘陵とはかなり離れており、一連のものと考えるのは難しい。付近に甕棺墓域の存在が推定される。また、SD100からは弥生時代中期後半～古墳時代初頭の遺物が出土しているが、上層の黒褐色粘質土層出土の遺物は弥生時代後期以降が中心であり、SD100の時期は弥生時代後期～古墳時代初頭と推定される。この時期は、第4次調査地点で検出された SDO2 や包含層の時期と重なり、一連の集落の一部であると考えられる。

本調査地点では、標高の高い部分では、弥生時代中期後半頃の甕棺墓の一端が見られ、中世の集落が展開し、標高の低い部分では、弥生時代中期後半～古墳時代初頭頃までの集落が広がっていたことが明らかになった。周辺における遺跡の展開が期待される。

図版1



1. 調査区南側全景（南から）



2. 調査区北側全景（南から）



1. ST01 (南東から)



2. ST02 (北東から)



3. SD100 (西から)

図版3



1. SD100遺物出土状況
(北から)



2. SD100遺物出土状況
(南西から)



3. SD100 A-A'土層断面
(北東から)



4. SD100 B-B'土層断面
(北東から)



1. SD100東端落込み（西から）



2. SD12・SD14・SD02（南から）



3. SK89（北から）

図版5



1. 調査区上空より南を望む



2. 調査区上空より北を望む

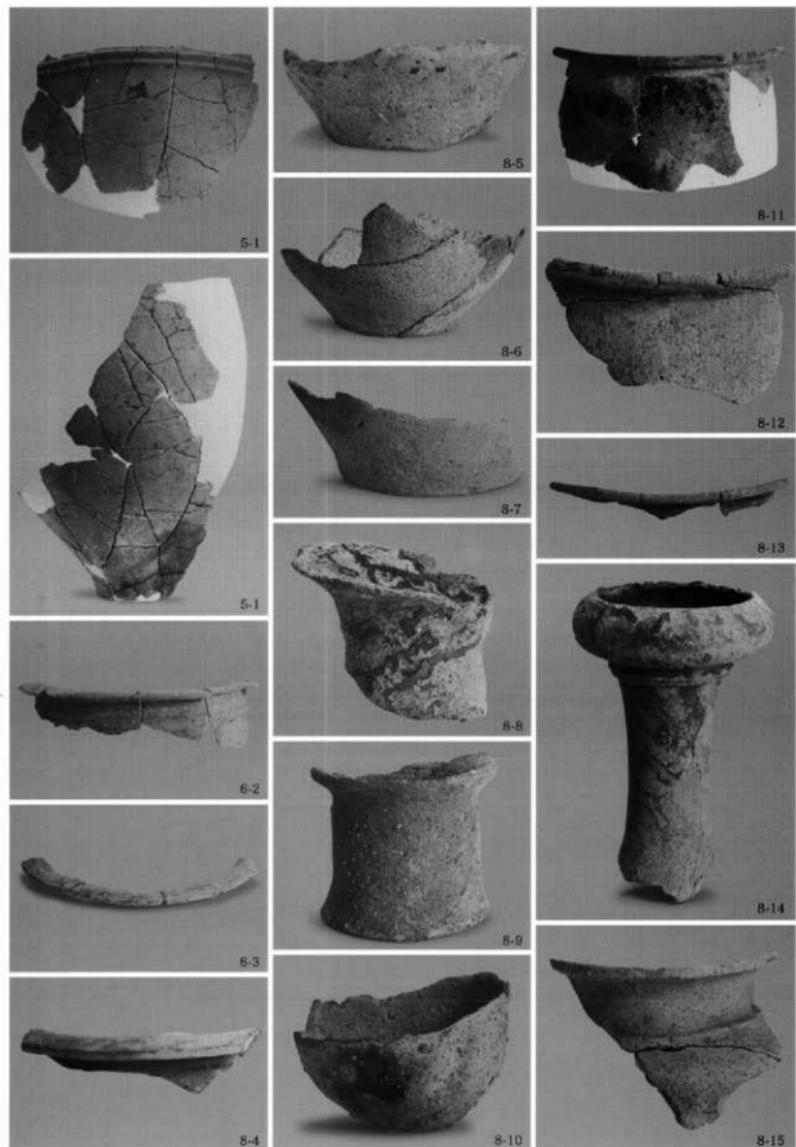


3. 調査区上空より東を望む



4. 調査区上空より西を望む（福岡空港）

図版6

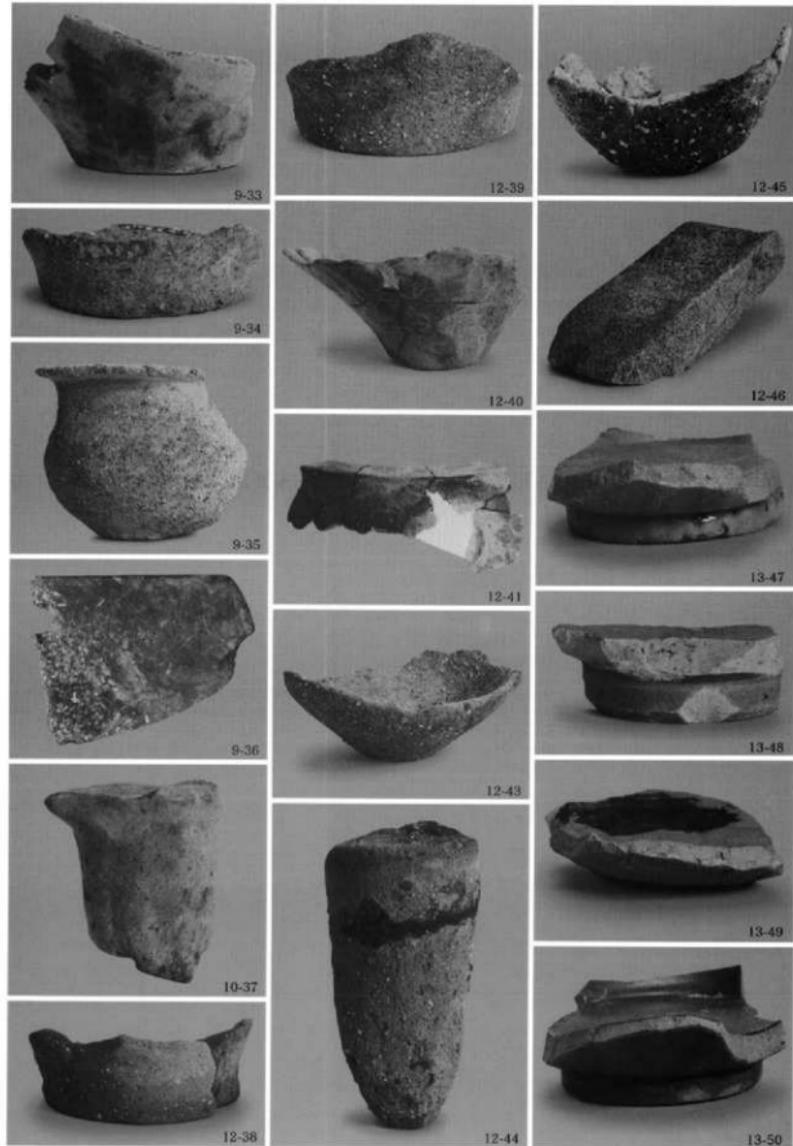


出土遺物1

図版7



出土遺物2



出土遺物3

图版9



出土遗物4

福岡市埋蔵文化財調査報告書第777集

席田青木遺跡5

—空港線関係埋蔵文化財発掘調査報告書2—

2003年(平成15年)3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 川辺印刷有限会社
福岡市南区高宮1丁目7-19

